

令和元年5月25日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01875

研究課題名（和文）＜女子割礼／女性性器切除＞の民族誌的研究：多様な選択肢とアフリカ女性の社会的地位

研究課題名（英文）Ethnographical Study on FC, FGM/C: Choices on life course and social status of African women

研究代表者

中村 香子（Nakamura, Kyoko）

東洋大学・国際学部・准教授

研究者番号：60467420

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アフリカにおけるFC・FGM/C（女子割礼・女性性器切除）の現状とその廃絶運動に対する当該社会の反応を包括的に理解することを目的として実施した。現地調査の結果、近年、FC・FGM/Cをめぐるのは、単にこれを行う／行わない、という選択肢だけでなく、行い方、施術方法に3つの選択肢がうまれていることが明らかになった。スタイルの選択において女性たちは、自身の教育レベルや居住地域を考慮しており、みずからのアイデンティティを表現するものとして施術方法を位置づけており、新しい切除方法の主体的な選択には、伝統的なやりかたと、新しいやりかたの双方に価値を見いだしていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニティにおける廃絶運動は主として開発プロジェクトによる教育プログラムをとおして行われているが、そもそも当事者である人々はこうしたことを運動推進者よりずっと身近な問題として理解し、それらを承知した上でこの習慣を長年継続している。教育プログラムは、個別社会の文脈下での意味の多様性や、現場で起きていることの多様性に対応できていないという問題を抱えており、そのために多くのコミュニティでFC・FGM/Cの隠蔽化が進行している。本研究の成果は、FC・FGM/Cの問題を個別社会の文脈から捉えなおし、廃絶運動を個別社会の主体性を重視したものへと変革する方途を拓くことに貢献できる。

研究成果の概要（英文）：Female genital mutilation/cutting (FGM/C) is one of the major issues in Africa. Despite powerful global and national movements for abolishing it, many groups have maintained the practice. In this presentation I would describe the dynamic process underlying the changes in FGM/C and clarify the gap between global discourse and local recognition by focusing on the newly created “cutting styles,” which involve less mutilation than the traditional style.

The newly invented kati-kati style now has become popular among the secondary school girls which represents their new womanhood identities. They do not view choices about circumcision as involving decisions between “right or wrong”, “good or bad”, “healthy or unhealthy” and “safe or unsafe” but rather as ways to express their positions to the “Western modernized world” or to express their own identities in the context of local tradition.

研究分野：アフリカ地域研究

キーワード：女性のライフコース 一夫多妻 強制結婚 家父長制 年令体系

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「Female Circumcision: 女子割礼」もしくは「Female Genital Mutilation/Cutting: 女性性器切除」(以降「FC・FGM/C」)は、アフリカ開発に関わる問題のなかでも最も注目されているもののひとつである。しかし、これほど議論のわかれる問題はないであろう。1970年代に欧米のフェミニストらがFC・FGM/Cを「女性に対する野蛮な暴力であり根絶が必要」と主張して以降、これに対する「当該社会における文化的な意味を無視して外部社会が介入すべきでない」という主張とのあいだで、人類学、社会学、医学、歴史学など、学問分野を超えて議論が繰り広げられてきた(岡 1998、千田 2002、白石 2011 など)。

1990年代後半からの約20年間に、この慣習をもつアフリカ・中東の29カ国のうち26カ国が禁止法を制定した(Unicef 2013)。この事実は、トップ・ダウンで進められてきた欧米主導の廃絶運動が一定の成果をあげたことを示している。しかし、これらの法律は罰金や禁固をともし厳しいものが多かった。このため、エチオピアでは慣習の隠蔽・潜伏化がすすみ、ソマリアでは女性の結婚年齢が若年化するという別の問題が発生した(World Vision 2014)。すなわち、法律整備は、それだけでは廃絶運動のゴールとはなり得ていないことが明らかである。トップ・ダウンで画一的に進められてきたFC・FGM/Cの廃絶運動が取りこぼしてきた事象や、それがもたらした新たな問題に目を向けることは、この問題の解決のために必須であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような背景のもと、民族誌的なアプローチ(ボトムアップ・アプローチ)によってFC・FGM/Cをめぐる問題を人びとの個人的な背景・経験・社会的地位などと関連づけながら、現地の文脈のなかで把握することを目的として実施した。

3. 研究の方法

研究対象は、ケニア共和国の北中部の半乾燥地帯に居住するマー語系牧畜民の社会である。ケニアでは、民族集団によってこの慣習を維持している社会、すでにこの慣習が消滅した社会、もともとこの慣習をもたない社会、に分かれる。マー語系牧畜社会は、このなかでもこの慣習が特によく維持されている社会のひとつに分類される。ケニア全体では、15～49歳の女性の27%がFC・FGM/Cを受けているとの報告がある(Unicef 2013)。本研究は、現地での関係者に対する聞き取り調査とその結果の分析を軸に実施した。

また、FC・FGM/Cはアフリカのさまざまな社会で維持されているが、その施術方法(誰によってどのように)、施術を受けることの意味(宗教的な意味、社会的な地位の変化、倫理的な含意など)、施術時期、施術場所は、社会によって、または、個人の選択によっても多様であるため、他地域の研究者と研究会を組織することによって、ケニアの農耕社会、エチオピア、ソマリア、スーダンにおける事例と比較しながら考察をすすめた。研究会は、研究期間中に11回実施した。また、2018年度には、日本アフリカ学会でフォーラムを企画し、議論を深化させた。

4. 研究成果

(1) FC・FGM/Cをめぐる選択の多様性と意志決定

現地調査の結果、近年、FC・FGM/Cをめぐるのは、単にこれを行う/行わない、という選択肢だけでなく、行い方、施術方法にいくつもの選択肢がうまれていることが明らかになった。従来通り、女性の成人儀礼として実施する場合には、事前に長老による祝福を受けた後、清めのための水汲みに行き、剃髪し、特別の装身具、衣装を身につけて早朝に何人もの目撃者を動員して施術される。しかし、近年、従来通りに行う人は減少している。人びとは、深夜～夜明け前の時間帯に、特別の衣装など人目につく手続きを省略して、施術のみを受けるようになっているのである。これは、「違法行為」となるといまい、警察による取り締まりから逃れるためにFC・FGM/Cの「隠蔽化」が進行しているということである。一方、施術を病院で受けることは、消毒や、出血が止まらなかったときの処置体制が完備しているという点において、一部の人びとから評価されていたが、法整備後は、施術を行う医師も取り締まりの対象となったため、病院では断られるようになった。このため、「医療化」の可能性は閉じられたといえる。

また、「隠蔽化」の進行と同時に、施術方法の多様化という現象もみられるようになった。従来、当該社会で実施されてきた施術方法は、クリトリスと小陰唇のすべてを切除するもので、WHOによってタイプ2として分類されたものであった。近年では、これに加えて、クリトリスをすべてではなく半分切除する方法が新たに生み出され、人びとはこれに「カティカティ(kati-kati)」「スワヒリ語で「真ん中」の意」という名前をつけていることが明らかになった。また、WHOによってタイプ1として分類されているクリトリスの包皮のみを切除する方法は、「スナ(sunna)」とよばれ、これも新たな選択肢として登場していた。そして、人びとは「スタイル(sitaile)」と、英語をマー語化した言葉を用い、「スタイル1」「スタイル2」「スタイル3」と番号づけしたうえで、3つの施術方法を明確に区別したうえで選択肢として確立していることが明らかになった。

3つの選択肢からどれを選ぶのかという意思決定が、誰によっていかになされているのかについては、ケースバイケースだが、本人、母親、祖母(父親の母の場合もあるし、母親の母親

の場合もある) その他身近かな女性たちが話しあいながら決めていることが多かった。父親を含む男性はこの問題にまったく関与していなかった。当該社会においては、特に儀礼の場面における男女の役割分担が明確に規定されているため、男性はたとえ意見をもっているとしても発言する機会がなく、もし意見を述べる機会があったとしても、「最終的にどの選択がなされたのかを尋ねることは(社会規範上)できない。これはわれわれ(男性)の問題ではない」と多くの男性がインタビューで答えた。

ある施術者の女性は「娘自身がどのスタイルがいいか、はっきりした意見をもっているケースが多い」と言った。それを裏付ける事例として、同じ父母の姉妹であっても、異なるスタイルを選んでいったケースもあった。

学校教育を受けた女性、とくにプライマリー・スクール8年間を卒業後、セカンダリー・スクールに進学している女性たちが「カティカティ」を選ぶ傾向があった。また、「スナ」を選ぶ人は現状ではごく例外的だが、それらの人びとは牧畜集落ではなく、町に居住していることが明らかになった。すなわち、スタイルの選択において女性たちは、自身の教育レベルや居住地域を考慮しており、国際社会のこの問題に関する主流なディスコース(「安全/危険」「健康/不健康」「正しい/誤っている」など)はほとんど考慮していない。すなわち、みずからのアイデンティティを表現するものとして施術方法を位置づけていることが明らかになった。「カティカティ」という新しい切除方法の主体的な選択には、伝統的なやりかたと、新しいやりかたの双方に価値を見いだしている新しい世代の意志をよみとることができる。

また、法整備の直接的な効果として、「行わない」ことを選択した女性もごく例外的だが存在していた。この選択をおこなった女性は、町に居住し、敬虔なクリスチャンであった。

(2) FC・FGM/Cをめぐるコミュニティの分析

コミュニティにおいて反 FGM の活動を積極的に実施しているのは、ローカルの CBO (Community Based Organization) の設立者や地方政府の役人、あるいは、国際 NGO が実施するセミナーで学んだ CHV (Community Health Volunteer) とよばれる人びとである。これらの人びとは、同一民族であり、文化的背景を共有しているため、難しい立場に立たされていた。

特に、国際 NGO は廃絶実現のため、こうした人びとの貢献に大いに期待している。聞き取りによれば、NGO は「救済すべき」女性がいれば報告することを義務づけ、報告のための通信料という形で、携帯電話そのものや、携帯電話代と称する「経費」を支給することもある。ある地域のチーフは特定の国際 NGO と強い関係にあり、報告にとっても積極的で、コミュニティの人びとから「スパイ」役を選んで情報を収集させて報酬を支払っていた。こうしたことが原因で、コミュニティでは、隠蔽してでもこれを継続したい住民と、それを阻止しようとする人びととの間に亀裂が起きていた。FC・FGM/C の問題が、権力や金品の問題と重なることにより、まさに「政治化」し、コミュニティの信頼関係が脅かされるという事態は、廃絶運動家が予期していなかった大きな弊害といえるだろう。

(3) 今後の課題

FC・FGM/C の施術方法については、女性が自ら選択した「スタイル」を結婚相手も認める必要があり、この意味においては、この社会で施術方法を自由に選ぶことと、結婚相手を自由に選ぶこと(すなわち恋愛結婚化)は強く関連した問題である。結婚相手の選択方法は、結婚後の女性の家庭内での発言権などとも関わる問題である。また、今回の研究成果から、学校教育を受けた女性が新たな「スタイル」を主体的に選ぶ傾向がみとめられたが、こうした女性は牧畜業ではなく、給与所得のある職業につく傾向があり、その場合は世帯経済に貢献する存在となる。新たな選択をおこなった女性たちの今後のライフコースの展開に引き続き注目しながら、彼女たちのライフヒストリーの収集により、FC・FGM/C に関する選択と女性の社会的地位との関連を、結婚相手の選択に関する女性の主体性、結婚後の女性の経済的権利と関連付けながら整理して考察する必要があるだろう。

参考文献

1) 岡真理(1998)『『同じ女』であるとは何を意味するのか - フェミニズムの脱構築に向けて』江原由美子編『性・暴力・ネーション』勁草書房。

2) 千田有紀(2005)「コメント - 『文化相対主義』を超えて」『アフリカ研究』66: 65-66.

3) 中村香子(2016)「ケニア・サンプル女性の結婚をめぐる主体性の創出過程-恋愛結婚・非婚に注目して-」『アフリカレポート』54: 19-31.

3) Unicef (2013) “Female genital mutilation/cutting: A statistical overview and exploration of the dynamics of change”

4) World Vision UK (2014) “Exploring the links: Female genital mutilation/cutting and early marriage.”

〔雑誌論文〕(計 3件)

- Kyoko Nakamura, Life Story as a Tourism Commodity among the Kenyan “Maasai”, *global-e*, 査読有, 12(12), 2019,
<https://www.21global.ucsb.edu/global-e/march-2019/life-story-tourism-commodity-among-kenyan-maasai>
中村香子、「伝統」を見せ物に「苦境」で稼ぐ 「マサイ」民族文化観光の新たな展開、
アフリカ研究、査読有、92、2017、pp. 69-81
中村香子、ケニア・サンプル女性の結婚をめぐる主体性の創出過程-恋愛結婚・非婚に注目
して、アフリカレポート、査読有、54、2016、pp.19-31

〔学会発表〕(計 16件)

- Kyoko Nakamura, Changes in local attitude toward FGM/C under the influence of global “zero tolerance” campaign: A case of a Kenyan pastoral people, "Reconsidering FGM/C: Challenges from medical and anthropological perspectives" (Toyo University, Tokyo), 2019
Kyoko Nakamura, Local recognition alienated from global discourse: Changes in Female Genital Mutilation/Cutting in a Kenyan pastoral community, International Symposium on “African Potentials and the Future of Humanity”, Kyoto University, 2019
中村香子、アフリカ牧畜社会のフィールドワーク ~ひと粒のビーズから~、「女性フィールドワーカーは語る」(於:津田塾大学) 2018
中村香子、ケニアにおける恋愛ツーリズムに関する一考察-「マサイの戦士」の経験から、
観光学術学会第7回大会(於:二松学舎大学) 2018
中村香子、<女子割礼・女性性器切除>に付与される新たな意味、日本アフリカ学会第55
回学術大会(於:北海道大学) 2018
中村香子、「マサイ」をめぐる表象の重層性 ケニアの牧畜民サンプルの「民族衣装」の
新展開、日本文化人類学会第51回研究大会分科会:「少数者表象のポリティックス 展
示、衣装、観光、芸術の文脈に現れる「もの」から」(於:神戸大学) 2017
Kyoko Nakamura, Ethnic tourism as a stage for 'attraction' and 'aid': A case study
on the Kenyan 'Maasai' people, African Studies Seminar, Institute of African
Studies, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea, 2017
Kyoko Nakamura, Life story as a tourism commodity in Kenya, Workshop on
Participatory Tourism in Africa (!Khwa ttu, Cape Town, South Africa), 2017
中村香子、民族アイデンティティを加工して売る 「マサイ」のみやげもの、平成28年
度JCAS次世代ワークショップ「伝統文化とグローバルな観光現象のせめぎあい:みやげ
ものを巡る政治・文化・ものがたり」(於:京都大学) 2017
中村香子、「伝統衣装」のいま ケニア牧畜民のビーズ装飾を事例に、日本学術会議近
畿地区会議学術講演会「アフリカの進化と文化 -われわれがアフリカから学ぶこと-」、
2016
中村香子、「観光」と「支援」の結節点としての民族文化観光 ケニア牧畜民による「苦
境」の「演出」、観光学術学会第5回大会(於:立命館大学) 2016
中村香子、「伝統」を見せ物に「苦境」で稼ぐ ケニア民族文化観光村の事例から、日本
アフリカ学会第53回学術大会、2016
中村香子、牧畜民サンプルの肌とビーズの距離 引き剥がし、再び求める、2015年度
フィールドネット・ラウンジ「装い/社会/身体:フィールドワーカーによる通文化比較
研究」、2016
Kyoko Nakamura, Local reactions to the "Prohibition of Female Genital Mutilation
Act" in a Kenya pastoral community, “How Do Biomedicines Shape Life, Sociality
and Landscape in Africa?”(於:国立民族学博物館) 2015
中村香子、「マサイの戦士」の戦略-ケニア民族文化観光とのつきあい方、観光学術学会第
4回大会(於:阪南大学) 2015
中村香子、サンプル女性のライフコースの多様化 njartim(恋愛結婚)という選択、日
本アフリカ学会第52回学術大会(於:犬山国際観光センター“フロイデ”) 2015

〔図書〕(計 4件)

- 中村香子 他、昭和堂、『遊牧の思想 -人類学がみる激動のアフリカ』、『『ボーシィ』たち
の『旅』の終わり -観光業に従事する『マサイの戦士』の経験』、2019、p. 283-305
中村香子 他、古今書院、『フィールド写真術(FENICS100万人のフィールドワーカーシ
リーズ14)』、『美しさは自分でつくる-「マサイの戦士」の「被写体力」のみがきかた』、
2016、p.122-123
中村香子 他、九州大学出版会、『アフリカの老人 老いの制度と力の民族誌』、『社会の舞
台裏を牛耳る -ケニアの牧畜民サンプル社会における年長女性の役割-』、2016、

p.124-152

中村香子 他、晃洋書房、『アフリカの女性とリプロダクション - 国際社会の開発言説をたおやかに超えて』、「スルメレイが手にした選択肢 - ケニア・サンプル女性のライフコースの変容 - 」, 2016、p.75-106

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。